

## 無縁社会への挑戦

人間福祉学部長 牧 里 毎 治

東日本大震災以後、人々のつながりや絆についてこれほど語り継がれていることは近年まれにみられなかったのではないだろうか。助け合って生き残ることができたという美談から混乱もせず粛々と救援物資の配給や給水に並ぶ姿は海外メディアを通じて世界の人々に不思議な感動と印象を与えたという。阪神淡路大震災は、全国から駆けつけた災害救援ボランティアの未曾有の多さに1995年をボランティア元年とさえ言わしめたが、さしずめ2011年は、つながりと絆を再発見するコミュニティ元年というべきなのだろうか。

しかしながら、大津波で根こそぎ壊滅させられた地域では、いまだに住み慣れた元の住宅に帰れないでいる人たちも数多くいる。震災と津波による原発破壊によって生じた放射能に汚染された故郷には半永久的に戻ることもできず、地域外や県外に避難している人たちも相当多い。地域再生も生活再建も目処が立たず、このような生活の場である地域を追われた人たちにとっては、コミュニティ元年も画餅にすぎないかもしれない。

つながりや絆が薄い無縁社会は、被災地に限ったことではない。被災地は大災害が人々を離散させ無縁化させているのであって、むしろコミュニティを破壊された被害者である。無縁社会という言葉は、孤立死や孤独死などが後を絶たぬ現実が想像以上に進行していることを警鐘するNHKの報道番組から広がった。家族との絆も薄く、地域住民とのつながりの弱い高齢者や病弱者、障害者が増えていること、結果として事故や事件に巻き込まれ、生活に困り、命を失う人が急速に増えているのである。豊かになったといわれる日本社会で暮らしのセーフティ・ネットを奪われた人が密かに身の回りに増産されているのである。

先行きの見えない不況の真っ直中で倒産や解雇でリストラされたり、転職を余儀なくされて、その挙げ句、ホームレスやワーキングプアに転落する人々、自殺やひきこもりなど社会との関係が絶たれてしまう人たちが続出している。働く人々にとって必要であった安心安全のセーフティ・ネットが職場でははずたずたに分断されてきただけでなく、暮らしの場である地域社会でも家族が孤立化させられ、地域の助け合いは影をひそめている。

商店街のシャッター通り化、中山間地の限界集落化など日本の各地で地域社会は悲鳴をあげている。商店会も町内会・自治会も高齢者以外に後継者がなく、若年層が地域外へ流出しているのである。職場という繋がりや絆の希薄化が地域での繋がりや家族の絆の脆弱化と二重奏になって無縁社会を演出しているとはいえないだろうか。少子高齢社会といって若者の数が減ったとはいえ、企業や事業所という職場に勤労青年は存在しているのである。職場というつながりの「職域社会」と暮らしという「地域社会」の結びつきを強める二重構造の縁ある連帯社会をこれからは描いてみたいものである。